

『精神分析の中の隠れ対人関係論者 エリクソン』

鑑 幹一郎

前京都文教大学学長

(注) 当センター主催の平成25年度(第8回)対人関係セミナーが、平成26年3月1日(土)に京都文教大学学長(当時)の鑑幹一郎先生を講師にお迎えし、午前中に講演会、午後には事例検討会が行われた。本稿は、その講演会の記録を編集したものである。当日、鑑先生は多くのスライドを用いて講演されたが、紙数の関係でここではスライドは呈示できなかった。また、先生の倒置法的な言い回しはそのままとしたが、短縮のため反復などは割愛させてもらった。編集の都合で逐語録を修正したため、本稿を読むだけではわかりにくい部分があつた。このことを鑑先生と読者にお詫びしたい。なお、編集に際して、前センター長塩山二郎先生に多大な協力を得た。ここに記して謝意を表したい(編集委員会)。

【ご講演】

対人関係のメインストリームとエリクソンの立ち位置

E. H. エリクソンのことを「精神分析の中の隠れ対人関係論者」と書きましたけれども、英語に直すと「E. H. Erikson: As a Interpersonalist in Mainstream Psychoanalysis」になります。「対人関係論」というのは、精神分析の中で、どういうところに位置付けられるか。一応、私の話の前提として、話をさせていただきます。

フロイト、この本流というのが、メインストリームというんですけど、本流という言い方もちょっとおかしいといえまあおかしいです。学問的には同じ領域の中で、本流があつたり支流があつたり、正統派があつたり、異端派があつたり。精神分析の中には、非常に古典的な言葉が入り込んでいるところがあります。一言で言いますと、エゴサイコロジーという形になっております。最初は、エゴサイコロジーというのは、精神分析の中では1930年代ぐらいからと考えてくださった

らしいです。フロイトが『自我とエス(Das Ich und das Es)』という論文を書きました。それがいろんな意味で、治療的な面で役に立つということで、特に自我機能が中心である。自我機能というのは、どっちかということ、現実的なやり取りで、何か問題があるときに、それを修正していくような形、意識心理学的な感じがすごく強いのです。無意識はあまり問題にしないでもいい。もともと精神分析というのは、無意識論から始まっているのに、意識心理学的な方向でいって、今の行動論的な感じ。ハインツ・ハルトマン(Heinz Hartmann)という人は、分析家なのですが、ジェネラルサイコロジーという本を書いたりしているのです。心理学と合体したような形で考えている。

それに反論したのが、クラインです。もう1回無意識に戻りましょうということで、その一番中心にあるのを内的な対象ということで、対象関係論を提唱しました。この2つの間には、ものすごく論争がありました。フェレンツィという人が、アクティブセラピーというのを非常に積極的にやっていった。この後でもちょっと申し上げますけど、フロイトの姿勢というのは、治療者はこちらにいて、患者さんが治療者にいろいろ無意識を投影する。その無意識を操作していく。それが転移の分析と考えたら、その無意識は患者さんから投げかけられているだけでなく、こちらからもあると、つまり、治療者の側も問題にすべきではないかということがアクティブセラピーです。それはフロイトにしたら、いや、それは違う、それは精神分析ではないということで、結局は袂(たもと)を分かってしまうわけです。ところが、実際には、この考えというのは、非常に大事な考えで、やがて受け入れられていくのですが、約80年かかるのです。何か1つの考えが受け入れられるのには、相当時間がかかるということがお分かりになるとと思います。それがだんだん認

められるようになったのはごく最近です。これが対人関係論なのです。

こうなると、フロイトの自我心理学、あるいはメラニー・クライン (Melanie Klein) の「無意識論」というのと、もう1つ第3のボール、それが「対人関係論」となります。フロイトにしたら、いろんなものから患者さんの心を読み取って、そこにある問題点を指摘する。それが、ああそうですと分かるというのを洞察と言ったわけです。

それに対して、いや、洞察したって変わりません。そうではなくて、関わりの中で変わっていくということがずっとずっと大変だし大切。ということで、それを関係論という。ですから、この2つは、1つに統合されつつあるのです。ただ、分析家の積極的な関わりベースということで、つまり、私は治す人、あなたは治るために努力する人という構図です。そうすると自分の方は、いつもプラスの立場、善の立場です。今でいうお医者さんが自分は治す人、あとは患者さんにいろいろお薬、処方したりするのと図式は一緒なのです。そういう図式を、一者関係と言います。というのは、問題は患者さんだけだからという意味です。

一者関係から二者関係へ

一者関係に対して、「対人関係論」は両方、治療者がどんなに頑張っても、患者さんから影響を受けないということはありません。両方の影響、両方の力動を治療的に考えないとうまくいかないだろうということで、「二者関係論」が展開されるようになりました。分析家が患者に影響されてしまうことを逆転移と言いました。逆転移は治療の妨害です。ですから、分析家は、自分の分析をしっかり受けなさい、そして自分が逆転移を起こさないようにやっていきなさいとフロイトはいうのです。これは妨害物になると。

それに対して、対人関係論者は、治療者が影響されるのは普通のこと、避けることでなく、それを治療的に活用しようというのです。それらの主張がアメリカの中では、ハリー・スタック・サリヴァン (Harry Stack Sullivan) の考えと一体になった形で、「対人関係論」が出てくるわけです。そうすると、片一方は、患者さんというのがあって、それに対して治療者 (完璧な人) が患者さんを治していくという感じですけど、こちらに関しては、治療者もいろんな問題を持って、揺れ動いている。それも含めて治療関係を作らないと、治療そのものがうまくいきませんという

発想なのです。二者関係論の場合は、影響を受けながら、影響を与える。そして、相互作用を積極的に利用しようということで、今度は逆転移の治療的利用という考えが生まれます。1950年、1960年ぐらいです。そこから辺りを私がおりましたホワイト研究所の人たちがものすごく頑張った。ただ、それは、まったく別の流れ。本流の自我心理学と対人関係論とはほとんど最初は交流がありませんでした。私が、アメリカに最初に行きましたのは、1964年だったのです。その頃は、ほとんどこの両者は関係がなかったという状況です。1980年ぐらいから、少しずつ、つながりを持つようになってきたのです。

「二者関係論」というのは、まったく対等なのです。お話をしましょう、お互いに生身でぶつかりあいましょうということです。この中で、問題なのは、2人の外側に場があるのです。これを包む場があるということが、一つ問題なのです。対人関係の場という形で、それは、今回あまり強調していないところです。ただ、エリクソンのところで出てきます。分析家は、影響される。どういうことかということ、治療的にどう利用するかというのは、私たちの中から排除できないものということです。積極的にそれを使いましょうということです。ならば、それをどのように治療的に利用できるかということから生まれてくるのが、新しい経験、新しい学習、新しい対象関係、愛着、信頼、安心感、そういうものです。これはもう、重症の患者さん、重症のクライアントを見ているとすごくよく分かります。自分の生育史の中に愛着や信頼が全くないような人は、生きていけませんから、我々の前には現れないのしょうけど、本当にぎりぎりのところで生きてきたような人はあります。そういうとき、新しい形でセラピストと一緒にそういうのを得ていくという仕事がある。これがニューオブジェクトというアイデアです。これは、後で出ますけど、意外とエリクソンは言っているのです、新しい対人関係が一般化すると。

エリクソンの生育史とその背景

精神分析の一番オーソドックスな、フロイトの娘さんのアンナ・フロイト (Anna Freud) に分析を受けたのが、エリクソンです。ですから、メインストリームの中の一番中心人物として、エリクソンは扱われてきたのです。ところが、そのエリクソンが、今言ったような非常に対人関係論的なことを、ずっと言っているところを今日は話をさせていただきた

いのです。

ドイツのフランクフルトに生まれて、そして、ここが問題、生まれる前にお母さんがお父さんと別れてしまった。シングルマザーでエリクソンは3歳までいくのです。お父さんは、結局、死ぬまで分かりません。ですから、父探しというのは、エリクソンにとっては非常に大きなテーマでもありました。そして、母親が小児科医のホーンブルガー（Homburger）という人と結婚します。それで、エリクソンはその養子（継子）になります。これが実際は大問題というか、生まれるときもいろいろ難しい問題を抱えているわけですが、自分が養子（継子）になる。養子は英語で、ステップサン（stepson）といいます。ステップマザー（stepmother）とかいうと、養母（継母）です。自分が養子（継子）に迎えられ、ホーンブルガーという人が養父（継父）になるわけです。ステップファーザー（stepfather）です。それに対して自分のことをステップサンで、彼はずっと死ぬまで、このステップサン・コンプレックスと自分で名付けているのです。何かどこかぴったり来ない、この関わりの中で。どこかいつもグループの中にも、ちょっと外れているような感じになってしまうという形で、自分の中にあるステップサン・コンプレックスになると彼はずっと言っていました。それは、その理論にも表れてきます。非常にオーソドックスのメインストリームの中にながら、彼のやっている仕事はやはりちょっと違うのです、他の人と。そのことを今日は、皆さんにお伝えできたらと思います。

精神分析との出会い

彼は28歳（1930年）で、フロイトに会います。友だちのP. ブロス（Peter Bloss）、この人は思春期の精神分析で有名ですが、彼のところでトレーニングを受け始めます。分析家はアンナ・フロイト、フロイトの娘さん。そして、1933年にアメリカに行きます。ですから、この頃のトレーニングというのは短いのです。

ナチズムの影響はすごいです。エリクソンの場合は、ちょっと微妙なのですが、お母さんは、ユダヤ系です。お父さんは、どうも違うらしいのだけど、全然分からない。それとホーンブルガーはユダヤ人です。後には全部イスラエルに移ってしまいます。お母さんもイスラエルに移ります。ところが、彼は、何か少し気になって、自分がユダヤ人であることを言わないのです。それで告発されて、一時、ちょっと問題に

なったことがあります。非常に複雑な感じがします、自分がユダヤ人であるということに対して。これは、日本では本当に分かりにくい。ユダヤ人の迫害というのは、ほとんど理解できないのではないかと思います。

アンナ・フロイトに訓練を受けましたので、児童分析家ということでアメリカ、ボストンに行きます。アメリカで初めての児童分析家ということで、非常にもてはやされます。アメリカに行ってから、ハーバード大学でローゼンツヴァイク、H. A. マレー、デイヴィッド・リースマン（David Riesman）、有名な『孤独な群衆』という本を書いた社会学者、こういう人たちと交流ができたのです。イェールに移って、文化人類学者の人たちと一緒に仕事をします。精神分析家なら、こういう人たちとはあまり付き合わない。分析家もボストンにはたくさんいるわけですから。彼の付き合い方は、ちょっと違うのです。やっぱりこころ回り、興味があったのだらうと思います。

中西部のラコタ、ユーロク、それらの調査をする。精神分析家としては、非常に違った感じですが。ここでの調査で、子どもをどのように育てているかというのをずっと観察したのです。それが、『Childhood and Society 幼児期と社会』の中に、その調査報告書が出ています。私は、どういうところだろうと思って、見に行きました。非常に面白い体験をさせていただいたのですが、そのことをちょっとだけ、『リッグスだより』という本に書きました。

サンフランシスコに行って、1939年にパークレイに移るのです。カリフォルニア大学のパークレイ校、そこで積み木の研究をやった。これも非常に面白い研究です。1950年に教授になります。彼は、大学教育を受けていないのです。教授になれたというので、いつもエリクソンを呼ぶときには、ミスターエリクソンといていたのです、みんな。ミスターエリクソン。普通だったら、ドクターエリクソンです。ですから、教授になったから、プロフェッサーエリクソンになったわけです。そういう意味で、彼は非常に嬉しかったのだと思います。

ところが、大事件が起こってしまう。それは、マッカーシズムなのです。カリフォルニア大学は州立大学なものですから、そこで反米運動をやっている人たちはみんな追放される。大学では州の法を守って大学でちゃんと仕事をしますという宣誓書を書きます。それに対して、もう一つ反米活動などをしないとという宣誓書を書けと。共産党ではないという署名をして出せと

いう書類が来たのです。彼はこれを拒みます。もう一回サインしているのに、なぜサインがいるのかと言って、自分のサインをしない。サインしないということは、辞めろということなのです。結局、大学を辞めることになった。一番なりたかった大学の先生を辞めるというのですから、本当に大変だったと思います。

その次の年に、リッグスに移ってしまうのです。ここからリッグスにずっと落ち着いて、ここで大きな仕事をするようになります。最初に出したのが、先ほど言った『Childhood and Society』。これが、1950年に出ました。1950年がその事件です。彼は、教授になって、それを投げうってやったのですから、大変だったと思います。ここら辺りは、エリクソンの本を読むときに分かっていたかとありがたいと思います。

1977年に引退して、また3か月そこにいて、ポストンとサンフランシスコを往復しているのです。私は、1979年から1981年まで、リッグスで過ごしました。エリクソンは、毎年、夏の2か月、ストックブリッジに来ていましたので、その家がまだありました。そこで、リッグスの若い人たちの面倒を見たり、ケースプレゼンテーションという、実際にケースを持っている人がみんなやるわけです。そのときに、コメンテーターとして横にいてくれる。私も3回ほどケースプレゼンテーションをやりましたが、そのときに横にいてくれて、いろいろコメントをしてくれました。1994年に亡くなって、92歳です。R.J.フリードマンという人が、『エリクソンの人生』と訳されて新曜社から出ている本を書きました。これを読んでいただければ分かると思います。本の題は、『Identity's Architect』、「アイデンティティという言葉をつくった人」というような意味です。

娘さんが『In the Shadow of the Fame』、『有名人の陰で』という本で、お父さんについて書いているのです。すごい葛藤がある。それで、お父さんに、すごい反発をしていたのですが、最後には、結局は分析家になってしまうのです。非常に劇的な人生を送った人です。

エリクソンの真髄

これから、エリクソンの仕事の話をしていきます。エリクソンの考えでよく知られているものは、「Epigenetic Development」です。私は、「個体発達分化」というふうに訳しているのです。非常に面白いアイデアです。個体発達、系統発生。それらを込みにしたような

アイデアなのです。特に、普通の人のパersonalityの発達はどうかというのを赤ん坊から死ぬまでの間を図式化してとらえた。それで、ライフサイクルというアイデアが出てきました。これは新しい言葉として使われるようになったのです。発達の概念としては、皆さんも8x8コラムをご存じですよ。そういうアイデアを持ち出したのです。力動的で発達の危機という、この言葉がすごく大事なのです、これを今から少し説明します。

アイデンティティ論というのは、青年期論です。青年期というアイデアも、心理学的には、発達心理学としてはありましたけど、あまり深く考えられていなかったのです。ところが、ドイツ人は青年期的伝統があるのです。ゲーテの『若きウェルテルの悩み』とか、トーマス・マンの『トニーオ・クレーガー』とか、作品がたくさんあります。それらは、恐らく土台になっていると思うのです。そうするとアメリカ的というよりも、非常にドイツ的な発想に近いと思われます。成人の発達の危機というのを彼は考えているということです。青年期、それから成人期で、これは、ジェネラティビティ (generativity) と呼んでいる。新しい造語で英語にないのです。ジェネラティブ (generative) というのは、あるのですけど、これを名詞化してしまうと、英語の意味はありません。ジェネラティブというのは、生むとか育てるとか、そういう言葉があるのですけど、それで、日本語では生殖性という訳があるのですけど、それではエリクソンが言いたい意味が通じないので、私は、「世代性」と訳したのです。現在は、世代性、または世代継承性という形で研究されています。アイデンティティの概念はどんどん広がっていきまして、グループアイデンティティ、民族アイデンティティ、国家アイデンティティ、種のアイデンティティということで進んできています。

あまり知られていないところで、重要な、注目しておいた方がいいというのが、その「Somato-psychosocial approach」という、身体的なもの、心理的なのもの、社会的なもの。心理、社会的という考えはありますが、それに、身体もつながってくる。身体的なもの、心理的なのはフロイト的な考えです。それに社会的なものを加えるのは非常にエリクソンの。それが3つ結びつけているというところがあります。

相互性mutuality、これがまた非常に対人関係的なアイデアなのです。これは、オーソドックスの人は、ほとんど言わない、言ってはいけない言葉なのです。

影響を与えると同時に影響を受けるという関係です。関係的な存在。心理療法も、これが中心になります。これが、先ほど言いました一者心理学と二者心理学につながっているのです。

それと社会的なものと同時間軸と空間軸を組み合わせている。これも、非常に独特だと思いますけど、それが、次の図式になります。対人関係の時間軸、生まれてからずっと育っていくということです、その体制確立的なレベルというのは、文化的なものも、ずっと昔から現在まで、現在からこれからという、そういう中での私たちということになって、私はここにいるというわけです。我々が面接の対象の人はここだけど、ここにいる人は、こういう時間を、歴史を背負って、なおかつ、他の人につながりながら、ここで、非常に困っていると、そういう状況としてとらえましょうという。ですから、この3つをそういう形で表しています。

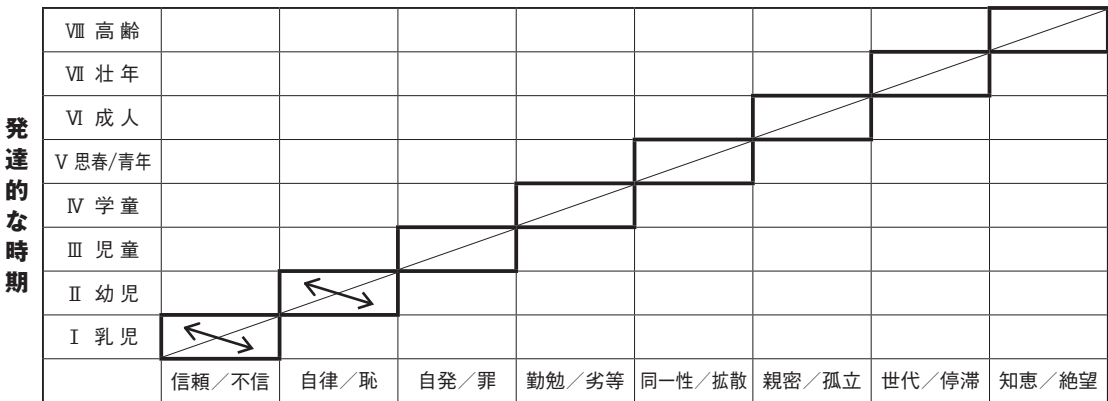
エリクソンの「psycho-social」な考えです。「psycho-social Ontogeny」という。「個人発達」です。それを、「Epigenetic development」と言います。もともと私たちに、こういうものが備わっているという考えなのです。それをグラウンドプラン、素質と言います。けれどそれが花を咲く時期、あるいは、そこでしっかりそれを得なければいけない時期というのがそれぞれあるという考えです。この考えがどこから来ているかということが「Epi」なのです。「Epigenetic」という。この「Epi」というのは、「以後」という意味です。「Epi」の前にはもちろん、「Pre」があるはず。 「Pro」です、プロローグとエピローグというのがありますよね、それと同じ。で、そのGeneticなものが、体内的発達が、「Pre」なのです。それに対して、生

れた後は、「Epi」なのです。この二つを頭の中にずっと描きながら、これをテーマにしていると。

胎内で、皆さんよくご存じのように、受精して細胞分裂していきながら、形態ができあがっていくプロセスが、胎内での成長です。あれは、ものすごく順序良くできているのです。あの順序は狂わすことはできない。順序を狂わせたら、結局私たちの人間としての体が普通の体にならない。胎内の形態は、順序良くそのとおりにいかないとおかしくなるというのが「プロジェネシス (Progenesis)」です。プロジェネシスに対して、生まれてからも、同じですとエリクソンは言うわけです。順序良くいくように生まれてくるのに、それがうまくいかないことがある。うまくいくというのはどういうことかという、大体それがグラウンドプランということになって、大きな枠は大体このくらいでしょうということです。

幼児期で何が一番大事かという、心理社会的な面からいうと、これはなくてはならない、それが信頼です。そして、ついてくる難しい問題が不信です。ここで、乳児期に一番大事な、得なければいけないものが、自律。それと、それがうまくいかないと、恥がついていきます。その次が児童期で、自発。これを自主と訳している人もあります。私も前は、自主と訳していたのですが、自発の方がいいのではないかと考えています。自発に対して、罰。これは非常に意味が深いのですが、時間的に、今は説明できません。フロイトの図式からいうと、ここまでなのです。これが、エディプスなのです。

それに対してエリクソンは、結局、我々は死ぬまで、そのときに得ていかないとうまくいかない課題が



グラウンドプラン

図 エリクソンの個体発達分化の図式

ありますよという。それが勤勉性 (industry) という言葉です。これは、勉強期です。勉強期をしっかりやるかどうかということは、いつも付いてきます。思春期で、アイデンティティというのが初めて出てくるのです。これがうまくいかないと、何をやっていいかわからない、混乱してしまう、ばらばらになっていくことです。成人期が、親密性。ここでもう1回新しい形で異性と出会うという時期なのです。そうできない場合もある。壮年期は、先ほど言った世代性です。これは、次の後輩を育てているという、そういう目で見られるかどうかということ。例えば、教師とかカウンセラーでは、まさにここが重要な仕事なのです。そうすると若い人たちは、こちら辺りで一所懸命勉強しているわけですけど、何をしているかということをやっている。ここに達するための仕事です、というふうに言えるのではないか。そして高齢期では、統合性。これをエリクソンは「知恵」という言葉に変えています。これは、「統合」の方がいいのではないかと、私が勝手にここは変えてしまっています。

例えば『信頼と不信』の「と」というのがあります。これが大問題。この「と」というのはヴァーサス (V.S.) という言葉です、英語で言うと。「対 (つい)」、何々対何々というその「対」です。それは非常に力動的なアイデアということが大事なのです。それを説明します。

グラウンドプランが8つあるわけです。それが、こういうふうが発達するということです。これは訳があるのです。どうしてこうなるかということです。グラウンドプランというのを下においてみますと、先ほど言いましたように、乳児期に、しっかりそれを得ていかないといけない。それはずっと一生続いていく。だから、我々は、大人になっても乳児期のテーマ、その信頼感とか誰かにすがり付いていたいとか、一緒にいたいとか、そういう愛着のテーマというのがいつもあるわけです。一番大事なのはここだと。自律とか恥のテーマ。自律のテーマが一番大事なのは、これがあったその次ですから、ここになるということ。そして、自発のテーマがここに来る。そうすると、勤勉のテーマがここに来るというわけで、一番、その葛藤状況です、それが得られていくための葛藤というのが、こういう形で出てくるというわけです。それを発達の危機と言いました。

プレイセラピーとは

これからは、今みたいなのを背景にして、エリクソンは何をしてきたかということをお話しさせていただき、その後、青年期の、あるいは大人のテーマをお話しさせていただきたいと思います。

まずは、遊びについてです。プレイルームでの遊びというのは、全て子どもの転移関係の象徴的な世界として展開するということが大事です。セラピストは子どもによって投影された人物であって、現実のセラピスト自身ではないのです。現実のセラピストが姿を現すと、子どもにとって脅威的な大人になってしまう。子どもは投影を中断されて、プレイルームから逃げだしたくなる。それが中断なのです。これが基本になります。実際にプレイルームに入ったとき、子どもの創造的世界にバツと変わるといことです。ですから、セラピストも、子どもの世界の住人の一人として子どもは扱う。それがすごく大事。だから、そうセラピストが理解して動けるかどうか。そうすると、セラピストの仕事は、どういう世界の中で、子どもはどのような動きをして、それが子どもにとってどういう意味があるかということ、言葉で子どもに返すことができるかということです。だから、子どもとただ一緒に遊ぶという意味では全然ありません。例の3つの世界です、言葉を含んで子どものその生活全体で表現すること。全部、象徴的なものですから、全部それは転移。だから子どもが遊んでいるというのは、ただそこにあるおもちゃを使って遊んでいるのではないのです。おもちゃを使って、自分の内的な、心の状態をそこに投影しているという。そして、その投影されたものを理解するというのが、セラピストの仕事なのです。だから、一緒に遊びましょうとか、泥んこになって遊ぶというのは、セラピーでもなんでもないということが大事なのです。それは、自己世界という子どもの世界です。今、言ったように、象徴的な世界です。小世界というのは、子どもとセラピストが展開する劇なのです。これがプレイルームという場です。そして、大世界というのはセラピストも家族も含めた全世界、子どもの世界です。家での世界とか、そういうふうを考えます。子どもの内的世界ということ。それはコスモスというふうに感じて。われわれが一番関心を当てているのは、ここです。今度は外の世界というのは、対人関係の世界になります。これはマクロコスモスです。

セラピーが始まると、セラピストに投影される心的

世界ということですから、もう始まったら、プレイルームに入った途端に、全部転移的世界、幻想の世界、子どもの世界というふうに理解する必要があるのです。そうでないと、もうプレイセラピーはできないということです。

それを考えるうえですごく大事なのは、保母さんとセラピストはどう違うのか。お母さんと子どもとの関係と、セラピストと子どもとの関係はどう違うのかということを考えて分かります。その中で、セラピストと子どもとの関係は何なのかということ、考えていただくといいと思います。ですから、転移関係の象徴行動、全部。私たちがしゃべる言葉は、子どもに対する解釈になるのです。子どもの世界を記述する言葉ですからということになります。

プロセスノートというのはどういうかたちになるかと言いますと、これは外側の行動を記述します。それを、ある枠組みで見えるわけですから、どういうことをやっていると、その意味はこういうことになり、自分にはこういうふうに見えるという、主観的なことをまとめて、子どもに働きかける。ですから、いつもこれらが私たちの背後にあるわけです。で、働きかける。そうすると、ここに対して解釈、私たちの言葉です、子どもに対する言葉をかける。そうすると、子どもがそれを聞いていて動くかどうかです。だいたいその解釈がうまくいってないときは、子どもは知らん顔しています。解釈がうまく当たって、子どもの心の世界を、ああ、先生はよく分かっているという、子どもはものすごく活発に遊び、プレイが展開するわけです。ということが、一番、治療的な意味では大事です。だから、一緒に泥んこになるというのは、セラピーでもなんでもないということがすごく大事です。

エリクソンの症例サム

ここでエリクソンの症例をお話します。大変面白い症例。てんかん様の発作のある子で、発病、発作の前におばあさんが心臓発作で亡くなった。てんかん性の発作というので、神経学的には何も問題ないということなんですけど、なかなか発作が治まらないです。けいれんのきっかけは、モグラの死骸を見て、動揺して、夜中に大声で叫んで、食べたものを吐いて、目やら口やらを引きつらせる。右半身に激しくけいれんがあったのです。これ、2回目の発作です。病院の診断では、大脳の左半球の脳障害によるという診断ですけど、どうしたらいいって、何もすることがない。2か

月後に蝶をうっかり握りつぶして、また発作が起こる。病院としては、もう手をつけられないという。誘因はどれも心的な刺激ですと言われるだけで、どうするかというと、分からない。ここからは、エリクソンの解釈になっていくわけです。非常に微妙なので、そのところをお話します。

数か月前に新しい住まいに、父方のおばあさんが来た。お母さんは、姑さんにあたるので、非常に気を使う。これがまた微妙なものです。ユダヤ系の家系の姑さんというのは、すごいのです。ジューイッシュ・マザーとアメリカでよくいわれるのです。ユダヤ系のおばあさんやお母さんというのは強いよという意味なのです。子どもを完全に支配している、そういう人。そういうお母さんが来るわけですから、もうそのお嫁さんは大変なのです。この子はちょうど元気盛りで、心臓の良くないおばあさんが来るわけですから、ちょっとおとなしくしてねと、もう一所懸命に抑えようとしているわけです。この子はお母さんが制限するものだからイライラしていて、顔色も悪いし、緊張気味だという背景があります。お母さんがちょっと留守していたときに、サムが椅子によじ登って、そこから落ちるのです。椅子の背中とこでボタン、と倒れる。おばあさん、あつ危ないと、それで自分のほうが心臓発作を起こして、そのまま倒れて死んでしまうという運命になってしまうのです。サムの発作が、その死亡後5日で起こる。どうもここに関係あるのではないかというのは、エリクソンの見立てです。お母さんは、サムはおばあさんが死んだのを知らないはずですよというわけです。おばあさんの死んだ翌日に、「おばあさんはシアトルへの長い旅に出かけたのよ。」と言うわけです。サムは頭のいい子で、「僕にどうしてさよならを言わないの。」と言うわけです。ずっとおばあさんと一緒に遊んでいたわけですから。お母さんは、「そういう時間がなかったのよ。」という。出棺については、お母さんが、「おばあさんの本がいっぱい入っていた。」サムは、「そんな本見たことない。」「なぜその本箱に向かってみんな泣くの。」と言うのです。この子がすごいことを言うので、もうこれはお母さんは、どう言ってもいいか分からない。それに対してエリクソンは、「いや、お母さん、ありのままのことを子どもに伝えたほうがいいですよ。」と言って、お母さんは修正する。「おばあさんは死んだのです。」と言う。そうすると、今度は逆転するのです。サムが、「うそ、おばあさんはシアトルにいるの

だ。僕は会いに行くのだ。」と言うわけです。子どもの中には、ひと言言うと、それが全ての世界が築かれている。非常に利発な子で、小さいときから我が強くて、早熟です、活発なのです。両親の期待もすごくあって、東部のいい大学へ行って、医者になるかもしれない。上昇志向が非常に強い。一般的に、ユダヤ人の上昇志向はすごいのです。

発作がずっと続いて、最初の発作の2年後にエリクソンが担当している。サムがドミノ（ドミノは向こうのお遊びの中でよく子どもがやるのです。）で、エリクソンは勝つわけです。そうすると、すごく蒼白になって、活気を失って、人形でエリクソンの顔をたたく。その後、うつろな目で吐きそうになって、一瞬、意識を失うんです。その後、正気になって、しゃがれ声で、「さあ、続けよう。」と言うのです。これで、この子のトランスのレベルはどうか、エリクソンにはよく分かったのです。それで動いていきます。ドミノで長方形の囲いを作るのです。エリクソンは、「これは死んだ人がお棺の中に入れられたみたいに、この箱の中にいるのかな。」と言うと、「そうだよ。」と。エリクソン、「君は私を打って、罰として死ななきゃならないと思った。ちょっと心配かな。」と言うと、サム、「死なねばならないの。」と言うわけです。エリクソン、「そんなことないよ。でも、みんなお棺におばあさんを入れて運んだとき、君はおばあさんを死なせてしまった。だから、自分も死なねばならないと思ったのかな。」と言うのです。これは、彼なりの解釈です。まだ続いて、「君は発作が起きて、もう死ぬのだと思ったのかな。」と言うと、「そうだよ。」と。ですから、自分の中にある、棺を見たことも、おばあさんが亡くなったことも、全部否定していたのですが、実際には体験している。エリクソンにはスラスラとしゃべるのです。おばあさんの死、その罪悪感、処罰恐怖がここへ出てきている。非常に印象的です。

抑圧されるのに耐えられないぐらいの、それで筋肉系が非常に発達する時期です。運動力、そういう知的なのはすごく進んでいて、男らしさが強調されていて、エディプス期に入った時期です。つまり、行動においてもそれが非常に自発性が優勢となる。それが禁止される。それで、それが非常に爆発的に外に出る。お母さんとボタンとぶつかるときがあるのですが、お母さんをやっぱり人形でたたいたことがあるのです。お母さんは倍返しで、子どもをまた人形でたたき返すのです。そういうようなこともある。死の恐怖が広が

る。モグラ、ママ、自分という、無意識の罪悪感とか、処罰恐怖として。彼にはこういう苦しみがある、実際にあるわけです。それを象徴して、お棺を作って遊ぶ。いつもその内的な恐怖感がカウンターになって、外側に出てきて、それがこういうふうになっている。そうすると、内的には非常に大変な恐怖感に満ちた生活をしているということを見ていくわけです。

こういう攻撃性はむしろ当たり前のことなのだと分かってきます。それで、いろんなものが攻撃的な、それが一種の適応的な姿になっている。発達のな位置としては、攻撃的な状況があって、外側ではちょっと手に負えないようなかたちになっている。

これを理解する上で、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』という映画もあります。セルジオ・レオーネという人の映画です。ここではユダヤ系を扱っている。これを見ると、そういう世界の人なのだというのがよく分かります。興味があれば見てください。こういう文化的なものの理解に非常に役に立つ映画です。

移行の体験、これはアメリカにはわりと強いのです。低所得者層から中流へという。住宅地区とかもすぐ違いますから、そこに入って行く。今度は逆に、ユダヤ人だけどいい子だねと言われるようなことをしないといけなくなる。それはすごく子どもにとっては大変。プロテスタントの世界というのは、非常に厳しいです。きちっとしないといけない。サムにとっては非常につらいところ。非常に禁止的な感じがする。家族もそういうかたちで、今までとは正反対の、今まで表現して頑張ればよかったのが、今度はできるだけきちっと禁止的に動いて、節度を保つということです。非常に難しくなります。姑さんとお母さんとの関係、これも大変です。だから、いろんなものが積み重なってきたのがよく分かるのです。サムの突発的な行動です。衝動的になってくる。そこでおばあさんが心臓発作を起こして、実際には死んでしまう。サムは非常に鋭い観察しているのですが、お母さんのほうが何かと隠したがつているのです。サムのためと思って、サムがショックを受けないようにということ。それで隠している、それが反対になって現れているのです。

親子の関係で、いたずらで手がかかって、非常に禁止的になるのです。母の無力感とか、いろいろなものが働いて。この悪循環の中で、お母さんの危機感がまたすごい。これは世代性のテーマが、今度はあるのです。静かにしてないといけないんですけど、目の前で

子どもがバタン、と椅子から落ちますから、大変だったのです。この母と子、姑の関係というのは、非常に気遣う、ユダヤ人の世界となると。ウディ・アレンの映画に『ニューヨーク・ストーリー』というのがあります。その中に、これがもう見事に描かれているので、皆さん、興味があれば見てくださればと思います。

心理社会的な問題、3つの次元の関わりですけれど、心理社会的・経済的状況、低層階級の中での努力です。これは非常に歴史的な問題もありますし、いろいろ文化的な問題です。白人社会の中のユダヤ人、義母との関係、地域での位置とか、非常に難しいものが混ざり込んでいるわけです。その中で、今度は子どもの発達です。ちょうど肛門期からエディプス期の知的好奇心、あるいは身体的なものがあるのです。こういうものを全体として理解しながらセラピーをやっていくと考えるとさればいいと思います。

いろんなものを子どもは私たちに見せてくれる。それを、われわれはしっかり理解して返すということになるのです。子どもがプレイで満足して、「面白かった。」と子どもが言えたら、素晴らしいことです。ところが大人だとちょっと違うということです。ここから大人の世界に入ります。

リッグスでのエリクソンの働きと症例20歳の男性

エリクソンは、1950年以降は扱う対象がもう青年期から大人になっていくわけです。

リッグス・センターは、青年期から大人の人たちの開放病棟しかない精神病院です。統合失調症や境界例の人たちが約50名いる。患者が全部精神分析を受けています、例外なしに全部やっている。そういう人しか入院させないということでもあります。病棟では本当にすごい退行が起こったりして、大変です。私がいる間にも1人自殺して亡くなりました。エリクソンはこう書いています。「病院には十分に配慮された冒険を重ねて、患者たちが表現し、働く能力を示す機会や行動する機会、社会に責任を分け持つ力が与えられる。」全体が治療共同体として動いているわけです。全スタッフ会議、もうこれは徹底的に最初にやります。予測までやって、この時点で担当者を決めるのです。私も実際に、統合失調症の人とボーダーラインの人、2名ずっと長く続けました。臨時で面接したのは、5ケースぐらいでした。非常に大変でしたけど、いい勉強になりました。

ここで、エリクソンの『洞察と責任』に書かれてい

る20歳の男性、プロテスタントの神学校の学生の話をしてします。アジア伝道に行くための研修でパニック発作が起こってしまって入院した人です。

ミネソタという中西部の農村地帯で、お父さんは牧師さんです。ピッツバーグに移っているのです。おじいさんは非常に確固とした牧師さんですから、良心と克己心と自尊心を持って、深い慈悲に満ちた支配的な態度の人です。心理検査もちゃんとやっているのです。その結果、ボーダーラインの人格障害ということです。制止的な強迫性の障害があるということです。こういうかたちで、内部の攻撃的な衝動を統制しようと一所懸命。そのために非常に不安が高い。

エリクソンの言葉ですけれども、「患者に対してはその治療者の心は、患者の主題がほのかに現れていく。加えて、あるものに関して、私の重要さを認識させるものが現れて、内的なイメージとして、言葉として意識することができないもの、またはかなりはっきり言葉にすることができるものがある。」いろんなものがいっぱい混ざって、生き生きしているということです。私は、患者の言う内容が分からないときや、その気持ちが分からないときに、はっきりさせるときだけに、言葉を挟むようにしていた。しゃべっているのはゆったりとしゃべっているのですけど、心の中はわりと忙しくやっているという感じです。

面接の中で語られたことは、それ以前に語られたこととつながりを持っている。これは事実の連続性です、無意識のつながり。どっから話をしても無意識なつながりがある。実際には週5回の面接ですから、毎日面接をしているということで、お考えくださればと思います。ある特定の事柄から特定のプロセスが得られることもあるし、分からなかったことが結晶のようになって、パツと、「あつ、そういうことか。」というかたちで分かるということもある。

解釈の支え、解釈の背景には、自分の調和を求めて、主題、思考、感情、体験をまとめていく総合があります。我々はこれを頼りにしているのだというわけです。

発達して次々に卒業していくというのは、同時にこれまで親しんできたものを放棄しなければいけない。これが難しいこと。だから、なかなか成長したがらない。やっぱり、今まで慣れたものを放棄するのが一番嫌だというわけです。それで、その事実を調整しなければならぬ。新しい見知らないものにはすごい恐怖感が伴う。progression、前向きということですね

ど、これらがすごく大事だということです。退行、後返りというのは、基本的信頼を解放する場ですから、あの人はすごく退行してしまっているというのを、マイナスに捉えない。非常にポジティブに取って、これが大事だから、ここまで行って、これが得られたら前に進むのではないか、こういう考えです。

解釈についてのエリクソンの考え

解釈がどういうときに正しいと言えるかということですが、それは患者のはっきりした反応があることです。解釈の正しさというのは、意味内容の伝達が、内部に前向きに動いていることである。つまり、治療的な意味での示唆とか解釈でなくて、あるいは理論的に正しいとか、そういうことではないと。そうすると、ここがクライアントさんの中に動いているかどうかというのを、われわれはキャッチできるかと。精神分析でよくいわれるのは、この解釈が正しいかということ。あるいは、理論的にそれは正しいかとか。それはあまり直接的に関係ありません。大事なのは、カウンセラーが言った言葉が、クライアントさんの内部で、少し動き始めると、そういうことだということです。これは、私はすごく大事だと思いますよ。患者が内的に立ち直る、これを深く信じていると。それはそうですね。そうしなければセラピーできませんから。これは、われわれも信じているわけですね。内的な直感で、それは新しい洞察。ですから、そういうのをカウンセラーが持っていることで、実際に言わないのになんか伝達されるというところが、非常に微妙なのです。

転移は確かにあるでしょう。それに、ただ飲み込まれない。これがプレイセラピーと違うところです。プレイセラピーの場合は、セラピストは、その中で演じ切っているわけですから、飲み込まれているわけです。大人はそうならないということです。それが分析の仕事で、それによって患者さんは相互信頼感と現実感を取り戻す。実際には、患者さんは夢見ること、それ自体、夢を見られるようになるという、非常に大事だということです。これは夢という、こういう論文があります。患者さんが見た夢です。こんな夢を見ました、半年ぐらいして。古い四輪馬車です、四輪馬車時代で、馬車の中に大きな顔の人が座っている。顔にはなんにもなくて、のっぺらぼう。周りにはなんともいえず不気味な、細い、くねくねした髪があった。それは私の母かどうか分からなかったということで、不安夢みたいです。こんな夢を見ている。これが話題に

なっていくのです。

連想としては、日常生活のこと、かつての牧場のこと、おじいさんとのこと、それは、橋、小川を、手を引かれて渡った。これすごく大事なイメージなのです。自分の出生、こういうことを話していきます、イメージ連想してです。エリクソンは、この夢を見て、こののっぺらぼうの、顔なしの夢というのは、非常に切迫した発病のきっかけか、それとも、何か治療者に近づいてくるものなのかと。エリクソンは、これに近づいてくるものだろうというふうに取ります。それは関係の中で、なのか怒りと挑むような感じを持っていたという。こういう言葉にならない実感をエリクソンは手掛かりにしているんです。誰か分からない大きな顔で、いろんなことを考えていきます。私（エリクソン）、お母さん、祖父、神様、メドゥーサ。神様というのは、この人は牧師になろうとしていたわけですよ。今度は自分のほうも、治療3カ月目に突然入院して、手術を受けて、現在もまだ体がちょっと不安定だった。そうすると、先生が不安定なのに、私はどうしてまとまりのある人格とか、アイデンティティとか、顔を得ることができるでしょうかと、こういうことを伝えているのかというわけですよ。

神様の問題は、神学生ですから、真剣に、会堂からの光を見つめて、神様と顔を突き合わせながら、真剣にどうしたらいいかって問うていたということです。それは、自分のアイデンティティに対する苦しみなのです。象徴的にそれを表すのか、あるいはそのおじいさんの顔かと。最期に、死ぬ前に、おじいさんと仲違いしているんですよ。大事なおじいさんと、最期に会えなかったということがあります。けど、精神生活に知恵と確固としたアイデンティティというのは、このおじいさん、すごく重要なシンボルなのです。

こういうふうな、歴史的なもの、旧式なやり方とか、ミネソタという田舎から都会に出てくるということ、いろんな時代の混乱のシンボルとか、時代の文化的な難しさとか、農業の女性、農場としての、シンボルとしてのお母さんというようなことです。ただ、お母さんは非常に荒れる人だったということもありました。お父さんの象徴としては、ここには出てないんですけども、後ではお父さんのすごく重要なテーマ、長い髪の毛、くねくねしたというのは、ひょっとしたらお母さんかも。それは、メドゥーサの、ギリシャ神話のメドゥーサです。これ、見つめるとみんな死んでしまうという力を持っているメドゥーサです。

のっぺらぼうのイメージというのは、アイデンティティの喪失と言うこともできるし、女性のシンボル、メドゥーサとしても言うことができるという。のっぺらぼうの顔だけでも、エリクソンの中には、こういう連想がずっと湧きながら面接を続けているわけです。

エリクソンの強調していること

まとめに入らせていただきます。エリクソンの言っている言葉ですけど、治療的な関わりの瞬間において、治療者の意識には中心主題があって、下意識には多くのものが生起している。これが、患者とのコミュニケーションを妨害しないかたちであるという。修行時代の学習が、私たちにとって、統合的に働く。内的な支えとなって、私たちのスタイルに。ですから、みんな治療のスタイルを持っているわけです。これも大事だからということです。下意識的な思考としては、意識的に呼び出して、言葉にできるようにと。つまり、いろんな図式がいっぱいあるということ。先ほどプロセスノートというのがありましたけど、ああいうことです。ですから図式的に、あるいはフォーミュレーションがたくさんできているということが大事です。

彼は、一つの見方を持つということが大事だと言っている。a way of looking at thingsという。これは私の見方ですという意味です。皆さんも、皆さんの見方で見てくださいという意味が含まれているのです。押し付けはしませんということです。ここは分析的な考えですから、皆さんお分かりだと思います。

よい治療者とは、自分の考えが自分にフィットしているということです。ぎこちない感じではない。これは相性です。やっぱり精神分析にも、考え方に相性があるのではないかと思います。例えば、クライアントと気が合う、感じが似ている、受け入れられる、好意を持っている。クライアントを支配しない、動かしたい感じが起こらないとか。逆に今度は、束縛されない、あまり思入れにならないということです。こういうことをいつも考えている。患者さんを信頼しているかどうか。

心理療法で完全に客観性を持つということではできない。持ち得ると思うことは自己欺瞞ではないか、たとえば、自分が個人分析を受けて、治療や教育分析を受けても、カウンセリングを受けても。個人分析は、むしろ主観的な働きがうまく働くようにということを学ぶものです。私はいろいろ変わりますということではありません。そのスタイルというのは、意図的にできる

自分の感情、あるいは思考だけでなく、表情とか姿勢とか、声の調子なのか、そういう瞬間ごとの動きの中に示される。これは、私たちの無意識的なもので、ほとんど気付かない。しかも、これがすごく影響しているのです、面接で。ということが大事。相手が立ち直る力を持っているということが実感できると、面接が続けられるということです。面接の終わりに、立ち直る光、こういう微妙なことを書いています。

いろんな言葉を、あちこちで言ったのを拾い上げたのです。「最初の精神分析家」というのは、エリクソンがフロイトについて書いたところに書いています。私たちは観察される個人の積極的な共同作業の参加により、またその個人との誠実な治療契約の関係に入り込むことによって、初めて人のことを研究できる。ものすごく入り込まないと、心の研究はできないのではないかと言うのです。精神分析の方法はサリヴァンの言う参与観察、participant observerになることは避けられないし、また避けてはならない。それは精神分析の体系からしてそうである。だから、サリヴァンが、もうきちんとエリクソンの視野の中にあるということです。これが対人関係理論に彼が非常に近いところにあるということなのです。

私たちの中にあるものを意識しないで、他人にあるものは見えないだろうということです。歴史的な出来事の客観的な再構成、子ども時代をいろいろ研究、再構成するということではないです。むしろ、現在の地点から見て、構築的にとらえる。Constructive、構築的というのは、AさんとBさん、セラピストとクライアントの2人の間で作り上げていく、そういう新たな物語を。これは今、対人関係の中心にあるスターンが言っているようなことをエリクソンが言っているのです。

臨床的な推論の正しさの証明。患者がすぐ直後に、「あっ、そうです。」と言うことではないというわけです。前向きに進んでいる新しい驚きの洞察につながっているかどうか。この新しい驚きというのは、あるいは発見ということになります。精神分析とは、自己を観察することを学んだ観察者が、観察される者に、自己観察的になることを教えるという、そういうことなのか。自己観察的になることを教えるということなのです。私たちが観察して教えるというのではない。ここが一者的と二者的な違いが分かります。生きてまますの者の性質について学ぶために、その生きて者と共に何かを試してみる、それらのために役立つように何かをすることしかない。一緒にやってみないと分か

らないということを言っているのです。

相互的な活性化, mutual activationの相互的というはすごく大事なのです。自我の強さとは、現実吟味のあらゆる方法を利用しながら、各発達段階における相互的な影響によって、自分が他人によって動かされながら、相手を動かす。だから、共揺れしているということです。自分の個性によって、他人を動かしながら、他人の個性によって自分が影響を受ける。これは非常に二者的な考えです。クライアントから治療者やセラピストが影響を受けるなんて、オーソドックスの自我心理学的な人は誰も考えないです、自分が教えていると思っている。私たちは、ほかの人との関係によって存在する。これはサリヴァンが言っているのとそっくりです。お互いに関係し合い、それと対応する。partnershipというように対等なのです。これも非常にサリヴァン的です。観察者の自分自身に対する研ぎ澄まされた洞察、訓練された主観性, disciplined subjectivityが道具です。だから、これを研ぎ澄ましていきましようということです。主観的反応を道具として使う。ときには観察者の個人的感情が観察を支配してしまう。これが一種の逆転移なのです。

観察者は患者を観察するのではなくて、患者とセラピストとの関係を観察する。だから、それは関係のゲシュタルトです。ゲシュタルトはドイツ語で、英語ではconfigurationalという。ゲシュタルトのほうがいいです。患者さんの回復へ向かって努力し相手を変えることで、セラピスト自身が変わってしまう。両方とも変わっていくような、そういう関係です。相互的な観察, Mutual observation。参与観察者は、サリヴァンの言葉です。participant observerに対して、観察的参与者, observing participant。Participantにウェイトがある。これは、関係派の人たちが盛んに言っている。すると、エリクソンは、20年前にこれを言っているということなのです。理論的な枠組みをもって、事例を考え抜く、これが大事です。毎回セッションごとに、繰り返し考える。相手との面接の力に基本的な信頼を持ち続ける。忠実に技法に従う。待つということです。合意した目標を忘れない。辛抱強く正面から取り組むこと、それが実りを生むものです。

これで私の話を終わります。どうもご清聴ありがとうございました。